

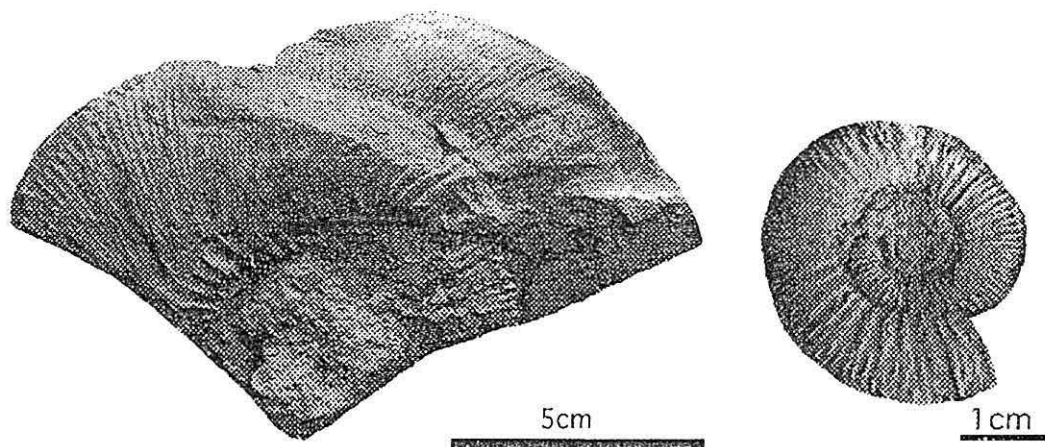
アンモナイト

アンモナイトのお話

アンモナイトは絶滅してしまった生物のひとつですが、その化石は古くはヘビやミミズの化石だと思われていました。日本では昔、半分ほど欠けたアンモナイト(写真左)を「^{せんす}扇子の化石」と言い、また丸みのあるものを「かぼちゃ石」と呼んでいました。今でも、アンモナイトにはキクの葉のような形をした曲線模様(縫合線^{ほうこうせん}という)が見られることから、別名「^{きくいし}菊石」とも呼ばれています。

ヨーロッパでは17世紀になるまで「ヘビの死がい」だと考えられ、「蛇石^{へびいし}」としてお守りにされていました。そう言う、ぐるぐる巻いたアンモナイトは、とぐろを巻いたヘビにも見えますね(写真右)。またミミズだとも言われ、実際に「巻いたミミズ石」を意味する「バーミセラス」という名を付けられたアンモナイトもあります。

「アンモナイト」という言葉も、18世紀にエジプトでアンモナイトがヒツジの角の代わりとして神「アモン」にささげられたことから、「アモンの石」という意味で呼ばれるようになった言葉なのです。

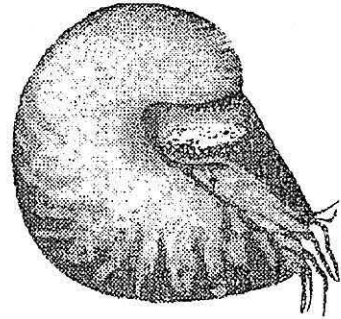


アンモナイト化石

アンモナイトは何の仲間？

アンモナイトは、古生代デボン紀（約4億年前）から中生代白亜紀末（約6500万年前）まで生きていた動物です。特に中生代では種類も数も多く、全世界の海で急速に栄えました。最小数cm～最大2.5mにもなり、オスよりメスの方が大きく、現在1万種以上が発見されています。

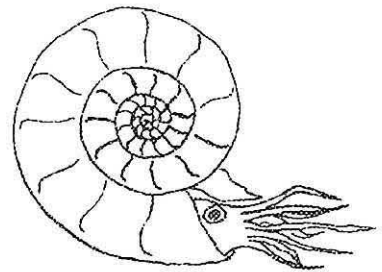
アンモナイトは軟体動物ですが、カタツムリやサザエなどの巻貝類ではなく、多数の足を持つイカやタコと同じ頭足類に含まれます。アンモナイトに近い仲間のオウムガイが、今も熱帯の海に生きており、「生きた化石」と呼ばれています。これによって、以下の体のつくりや生態を知ることができます。



現生のオウムガイ

アンモナイトの生活

殻の内部には空気の部屋が多数あり、大型でも浮き易くなっています。その空気の圧力を調節して浮き沈みしていたようです。主に、浅海の外洋を自由に泳ぎ回る種、海底をはっている種、そして植物に引っ付き完全に海底で生活する種がいたと考えられています。肉食性で魚やカニなどを食べていましたが、一方で首長竜やサメのごちそうにもなっていました。



アンモナイトの復元図

しかし、そのアンモナイトも白亜紀の終わりに恐竜と共に絶滅し、この地球上から永遠に消えました。今日ではその姿を化石でしか見ることはできませんが、科学文化センターには直径1mもの巨大アンモナイトや富山で発見されたもの数種類を展示しています。また1階質問コーナーの大理石の中にも小型アンモナイトを見つけることができます。どうぞ、太古の生き物に会いにお越し下さい。

（脇本 晃美）



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 (TEL.076-491-2123)

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

平成13年2月1日